

白から黒へ(一) こうの時代

たより

『美紗の会』 ニュース

第55号

平成19年2月5日
発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保 明子

三十二回 美紗の会のつどいを終えて

西松布咏

「嘘のかたまり誠の情け、白雪と人之心、かきもる思いで降る」といふ、わけて言われぬ世の中。元禄時代に埋もれてしまつた地唄の一節が、明治になつて蘇つた小唄。人も心も風潮變化する度に、聴いてしまつて古の世の中。昔も今も三味線の音に、この言葉があいまつて言ふに、まさしく今年のあまりの冷たい、わざと雪の如きを意味する。まさに、年齢となつて心に沁みてくる。余情となつて心議な魅力にひかれ、六歳からこの道に入つて早や半生が過ぎてきた。昨年の暮れに川野楠巳氏から「ラジオ深夜便」で、こころの時代」の出演依頼の電話を戴いた。氏はNHK番組のチーフディレクターの傍ら私費を投じて「最後の瞽女」小林ハル吉96歳の絶唱」の著書「小林ハル吉の琵琶」のCDなどを作成した。盲目の偉大な音楽家の芸談に比したら、「三味線に託した私の半生」などとは、と大いに躊躇した。しかし省みれば私の人生はまさに三味線と共に半世紀なのだ。さまざまに三味線音楽の変遷の末に西松文一師の地唄との出逢いで私の道は決まつてしまつたのである。それは「ゆき」と「髪」の降る白雪と人心のなせる業だったのかもしれない。それほど今は人生とそう思ふ。花も雪も払えれば清き袂かな。ほんに昔の昔のことをうなづいて空から降る雪となつて、我が待つ人も我を待ちけるよ」。我が待つことは相思相愛の仲も時の流れと共に別離が待つてゐた。しかし現は別れていた。さうと、今になるとそう思ふ。「花も雪も払えれば清き袂かな。ほんに昔の昔のことをうなづいて空から降る雪となつて、その眞ん中にかきもる思いで降る」といふ、わけて言われぬ世の中。



もたどり着く。天を敬い人を愛し日本の行く末を思ひ、角を引き受けた西郷隆盛もそうだったのだろか。
「私に千糸の髪がある。黒より黒い。私に一片の心があつて、雪より白い。髪はちぢむが、心は断ち切ることが出来ても心は断ち切れない。先人のこの熱い心をいつにまつたら唄い継いでゆけるだらうか。まだ見えてこない闇の道をこれからも歩み続ける道はこれか知らないだらう。いつかは差し込む一筋の光を信じて、二月二日の「この時代」に白と黒の想いは果たして伝わるだろか。

西松布咏

夜明けになると青空が拡がるでも、
この会も十一月十一日は朝から
土砂降りの雨。そういえば毎回は
会は毎回は、七人の欠席があり
い続いた。
美紗の会のつどいの目的は

初めで新内小唄の上調子にもの抗戦の稱生らりと芸者。難しい節まつをさる意氣で一唄さんの上の調子にも感わされずその粹らぬ女医の心を。病わされかえりぎりまで演出を躊躇した森田さん。でもも落ち込んで上方の風情で月光に照らされた想いの秋の夜を恋みりと語り。ちよびりやせても堂々たる体躯の川崎さん。芸者とぞ互いにあらぬ仲をさらりと一分うじつくりとした間合いで間かせらる。『槍さみ』を見事唄ひ分けられた。『槍さみ』を見事唄ひ分けられた。千寿美の教師でアーティストの伊勢さんは着し姿で、辰巳芸者の祭りに寄せる格気のよい『八幡祭り』で、その絵のよい『八幡祭り』で、辰巳芸者に引き止められ、板につき芸者に引き止められ、悪止めせずともその辛さを。と袖を払うもてる女の辛さを。二上り新内で切々と。『恋の七草』を見事弾き語りと百瀬さん。唄では鏑木清方描

声でやかた抱き合ふ姿の仲に忘れやかた
「一」と高尾太夫の客に忘れた山中風雨
一年句の「玉川」を、入門の霧に囲
気たつぱりに尾崎紅葉が芸者
に振られて作った「止め」。でも
帰る唄を唄った福武さん。
いつも着流しで役者絵から
抜け出たような川内さちもこ
「黒髪」を弾き語り。唄と糸
の間がなかなかつかめず繰り返しの稽古が白髪になり
りそうになつたのは指導した
師匠だつた、「一年ぶりは名取」美
紗会名物の長唄は名取連による「新曲浦島」
博士の坪内逍遙が初め大て海洋原楽曲
をダイナミックに描いた難曲を大熱演しやんやの喝采を受
けた。
剣道の竹刀を撥に替えて三
味江戸の神社を詠み込んだ見
『紀伊の國』を暗説での見
方情緒を再度練り上げ三十二
石船で賑わつた淀川の様子を「淀川瀬」で朗たとく。
の橋は計ち入りを心に秘め
ぶえぬ酒を帯びた蔵之助のつ
大き保こと朋麻さんは淡波
節の哀調漂う「呼子の女」を
自作の紬の着物姿で潮風の
磯の香りの東ね髮:の佐賀風

な芝居を彷彿とさせる唄だつた。唄は苦手を自認する岡崎こと「咏歌」。しかし味線と同じよう酒脱ながら三ペテランならでは! と下町情緒たっぷりの「辰巳の左様」を聞かせて喝采を浴びた。特別参加の三弦師菊音さんの「蘭蝶」は渋い喉で、お宮が夫を返しで欲しい糸約束へ向かためこそあれ未かけて東出かため「」の芝居場面ををしみじみ再現してくわくだ。最後を飾る演目は皆さんお待ちかねの花柳千寿文師による舞踏。「嘘とまこと」「嘘のかたまり」は嘘二題。「嘘とまこと」は嘘二題。「嘘のかたまり」を薄い

日頃の多忙な毎日を縫つて差し向かいの稽古を続けて下さる方々、そしてその機会がござり、お客様とともに集つて下さるのみひととき。この美しい重ねなど人々に支えられて今回も無事に楽しく終えることが出来ました。みなさま嬉しい会となつた。

桃色の着物姿にはほのかな色気
がたたずよい手拭いを姉さんが
ぶりしては小唄歌いを。席に身を
廓に身を置く遊女様々な
想いを舟の内に見立てて、苦
界の海上を沈まぬよう客の心
を船上に渡まつてゆくという一途な
その姿に踊りにかける師
の真摯な心が投影していたよ
うに思う。
次の上方唄『いざやゆきま
しょ』では渋めの衣装にかえ
てのご登場
あでやかな芸者を引き連れ
てのお座敷遊びや京都の扇子を好み
に繰りながらの見事な舞はお
座敷がまるまでの歌舞伎の大舞台高
く移つたかのように格調高く
羽左衛門丈にお見せしたかが
た。
かくして演奏会はそれぞれ
の熱演のうちに雨もいじつか
上がり夕刻となりからお客様
の「江戸浅草木遣り聲会」
喉主宰の丸茂章氏が鍛えられた
喉でご祝儀の木遣りの後に客
員起立し三本紹めをして下
さった。
一本目は出演者。二本目は
お客様。三本目は会場に。
「江戸古来から続いている
感謝の気持ちを表すしきたり
なのです」と丸茂氏は語つて
くださった。
私が常々感じていることが
この三本に込められていたことの



